

概 要

【研究背景】

第12回健育会看護・リハ研究会において、若年者に対しての非特異的腰痛（以下：腰痛）の発症因子が高齢者に対しても発症因子となるのか疑問に感じ、同テーマについて報告した。第12回の報告では腰痛の有無と体幹伸展筋力・伸展可動域に有意差、相関を認めたが、サンプル数が少なく信憑性に欠ける報告だった。座長からサンプル数を増やしての研究の継続をご指導いただいた為、今回はサンプル数を増やし、第12回での報告で腰痛予防に有効だと示唆された評価項目を再検証する事とした。

【研究目的】

高齢者の非特異的腰痛と身体機能との関係を再検証する。

【研究方法】

対象は、東伊豆町健康体操教室、3市町老人会（下田市、河津町、東伊豆町）の体力測定に参加している女性高齢者123名のうち器質的な腰椎疾患の既往のない117名とした（平均年齢 77.2 ± 7.2 歳）。測定項目は、腰痛の有無（NRS）、体幹伸展域テスト、体幹屈曲筋力、体幹伸展筋力、握力、TUG、片脚立位を行った。体幹筋力測定方法は、再現性、信頼性のあると言われている伊藤らの測定方法を用いた。体幹筋力測定には、ハンドヘルドダイナモメーター（Mobie：酒井医療社製）を使用した。対象を腰痛あり群と腰痛なし群の2群に分け比較検討した。各検査項目を2群に対し、対応のないt検定を行った。また、各測定項目の相関をみた。体幹伸展筋力においてはROC曲線によりカットオフ値を検討した。統計ソフトはR3.1.1を使用し、有意水準は全て5%未満とした。研究をするにあたり対象者様に説明し同意を得た。また、当院倫理委員会で承認を得た。

【結果】

腰痛あり49名、腰痛なし68名となった。体幹伸展筋力は、腰痛あり群 10.6 ± 3.4 kg、腰痛なし群 12.5 ± 4.9 kgと有意差を認めた。その他測定項目では有意差を認めなかった。腰痛と体幹伸展筋力、その他の測定項目で相関を認めなかった。腰痛の有無に対する体幹伸展筋力のROC曲線では閾値が13.0kgとなり、感度83.7%、特異度41.2%、的中精度59%となった。

【考察】

腰痛あり群は、なし群と比較し体幹伸展筋力が有意に低下しており、先行研究を支持した結果となった。しかし、腰痛に対し体幹伸展筋力は相関がなく、特異度も低値のため体幹伸展筋力の測定だけでは腰痛リスクの発見には不十分だと考える。

【結論】

体幹伸展筋力の測定だけでは腰痛リスクの発見には不十分であると示唆された。今後も腰痛について検討していく。

【引用参考文献】

- 1) 高橋和久. 日常診療で出会う腰痛の診かた. 中央医学者. 2010;2-6.
- 2) 伊藤修一. 慢性腰痛症患者における体幹伸展持久力評価法. 理学療法学. 1994;17.
- 3) 外間祥介. 腹筋と腰背筋の筋力, 柔軟性について. -健康人と腰痛者との比較-. 整形外科と災害外科. 1980;359-363.